■ 書　評 ■

朝倉隆太郎・梶哲夫・横山十四男著『中学校 社会科教育法』（図書文化社，昭和56年）

渋　沢　文　隆

教育実習にやってきた教生の多くは，実際に教壇に立ってみて，初めて授業とはこんなに難かしいものなのか，事前の準備をしっかりやっておけばよかったと気づくようである。これは，小学校以来，児童，生徒として受ける側から授業をみつめてきただけで，指導する教師の側から真剣に検討したことがほとんどないのだから当然の現象ともいえるだろう。しかし，附属校に勤務し，毎年１０名近くの教生指導を担当し，自分の授業の多くをそのために提供し，しかもその後始末に多くの時間を費やさなければならない教師の側からすれば，実習前に履修したはずの「社会科教育法でいったい何を学んできたんだ」といいたくなる思いにかられる。もっともそういう筆者も教育実習時には同様の体験をしてきているのだが……。

一方，現場に出てしばらくすると，これも多くの教師が，例えば「なぜ生き生きした授業ができないのだろう。生徒を生かした授業にするにはどうしたらよいのだろうか」「自分の授業は知識の切り売りをしているにすぎないのではないか。社会科の授業はこれでよいのか」といったような悩みに直面する。そして，こんなときにかぎってふっと大学時代に受講した講義が思い出されたり，教育実習のにがい体験がよみがえってきたりする。そして，もっと大学時代にきちんと勉強しておけばよかったなあと反省したり，またそれをとり戻したいので何か社会科教育全般にわたってかつすぐ授業に役立つようなテキストがないかなあと思ったりすることがある。学生時代の教科教育法の講義や教育実習の体験は，教職の道を歩む者にとっては原点であり，拠所のようなものになっているのではないだろうか。

それだけに「社会科教育法」の講義は従来のような理論面ばかりが強調されたものではなく，教育実習にも有効であり，かつ現場においても役立つような理論と実践が結びつき，バランスのとれたものであって欲しいと願わずにはいられない。指導案の作成ばかりでなく模擬授業などもどしどしやって，もっと実践面を強化したものであって欲しいと思う。

本書はこうした「社会科教育法」のテキストとして最適な本といえよう。現場の経験をもつ3人の大学教官が，実践に役立つようにということを目標に執筆しただけに，本書では全体のページの約半分が「学習指導の実際」に割かれている。また，現場では評価の問題がますます大きな

課題になってきているが，この点についても本書は「評価の工夫」という項目を設定し言及している。章末に社会科及び地理，歴史，公民三分野に関する文献抄録があるのも，本書を手がかりに，さらに社会科教育の指導や研究を発展させていこうとするものには有効であろう。欲をいえば，これに教育実習や現場で直面しやすい悩みを想定し，それを解決する糸口をQ＆A的なかたちで示唆するようなページもあってよかったのではないだろうか。また，これは共著の宿命ではあるが，項目だけでなく内容的にももう少し調整してあったらより利用しやすかったと惜しまれる。

いずれにしても，本書は中学校の社会科教育に関係する人々にとって，座右におきたい好書である。また，引き続き本書の姉妹編として小学校，高等学校の社会科教育法の企画・出版を期待したい。

（筑波大学附属中学校教諭）